

伝承

竹野浦河内物語

何代かの祖父たちが語りついで哀話

吉田 勝

(紹介のこぼ)

さる日、私は蒲江新高山海岸の彼方、元祿の高令者の集會に出  
席したところ、八十才にちかひ右吉田老翁が、かなり長文の伝  
承物語と書いてあるを貰った。若干の改訂を加えて掲げることにし  
た。もちろんお許しを得てのことである。(羽柴)

入津湾を船で沖に出ると、豊後水道が果てしなく広が  
つてゐるが、陸上からも尾浦に通ずる小懸津から大懸津  
へのおたりからの展望は、また格別である。この入津の  
海の片隅に、今から数百年前の歴史物語が語りつがれて  
いる。それは城跡があるとか、戦いがあつたとかで、は  
でやかに後世に語り伝えられるようなこととちがひ、大  
望をもちながらついに果すことが叶はず、哀れと秘めた  
物語りである。

時は源平合戦の昔、秋たけなわの頃日も傾いた七つ時  
(午後五時頃)、入津湾を塞ぐようにはいつて来た船団があ  
つた。一見驟然と見えだが、日が経つにつれ、浦辺の人  
々とも親しくなり、船に積んでいた魚具を見て、同じ漁  
師と思ひこみ、互いに交遊を深めていた。

ところが事實は全くちがつた人で、先年源平の戦い  
に源氏方に味方し、武勲をあげた武士の一回であつた。  
その目的は、昨年壇の浦で平氏を滅亡させ、披群の手柄  
をたてた源義経が、元頼朝の手づから追われ、九州に落  
ちてゐると伝えられるので、その義経に協力すること

あつた。しかし四国を出發する間際になつて、義経は奥  
州に追われたとのお話を聞いたので、その真相を探ら  
うとこの入海に錨をおろし、二人ばかりを豊後表(大分)  
まで探索に出していたのである。

この一団の長は四国の豪族、加久屋新左工門といふ  
四國ではその人ありと知られ、智勇人に務れた武將であ  
つた。世の友とえに、人情紙より薄しという言葉がある  
が、この加久屋新左工門は、もともと源氏の扶持など受  
けていなかつた。たまたま先年義経に召され、君王と仰  
いだ間極であつたが、頼朝公の仕打ちに義経さふびんに  
思ひ、生来の義侠心が燃え、自分のできる限りの力をつ  
くして、莫大(莫大)な軍資金と兵船を率いて、大望の船路をこ  
の地までたどつたのであつた。新左工門にしてはこれだけ  
義経の勢威をもつてすれど、九州を平定するはまたたく  
間のことと信じていた。

さてこの新左工門には一人の娘があつた。父母に下  
賢(下賢)く、容姿器量また人にすぐれ、歳も二十の若盛りで  
その丈と定めたる人物は清藤といひ、智勇人に委て、豪勇  
無双と評判の若武者であつた。まだ婚禮の儀式はしてい  
なかつたが、父新左工門も許した仲であり、式の滞つて  
いたの日は主君義経から救援を乞ふ親書が届いたので、昼  
夜無休の多忙のためであつた。

そこで復讐言をあげて出發となつた。娘は亡き母の墓  
にまいり、この度の事情を報告し、親戚や里の人々に別  
れを惜しまれ、はじめての旅路についた。ところが新左  
工門は旅の勞苦が重なつてか、当地につくと程なく疲氣  
となつた。清藤は心と痛め、部下をつれて疲れる父親と  
娘を守り、波静か女河内入江に船を看け、内浦谷に飯  
屋をしつらえ、医師と呼んで薬をすすめ、看護に精出し  
毎日であつた。





清藤は三嶋谷に人々のために寺を建立し、部下を励まして共々に入津湾の浦々の開墾を進めた。人々は清藤を主君と仰いだ。その後部下たちの懇望を容れて、清藤は地元のだよと呼ぶ女をめでとり、二人の男子をもうけた。名前を、兄は道壽(どうじゆ)弟を道因(どうえん)と名づけ、夫婦は心を合せて愛育つとめた。

二人の子供は父祖の血をうけて強く育った。主君親娘の命日には清藤はたよと共に内浦寺に参詣し、僧に頼んで特別に読経させてその冥福を祈った。

この道壽、道因二人の兄弟の豪傑話は今も村に語りつがれている。その一つ。

明治の末頃まで、河内には不思議とされていた骨つき、のまじない、かつは物語があった。

ある晩、道壽が便所に入っているとき、何者かの手が道壽の尻にさわる。道壽が素早くひっつかんで引きあげようとしたら、その手がすっぽ抜けた。道壽はその手を持って部屋に帰り、それを戸棚の中に入れていた。

すると、それから毎晩のように「手をくれ、手を返してくれ」と、窓の外からなげき声である。取りおわすにおると、七日目の晩「今夜返してくれなきや手がつけなくなる。手を戻してくれれば何でもかなえる」と訴える。そこで道壽は、この村の人には一切害をしないとい

う証文を書かせ、庭先の大石を指さし、「この石が朽ちてなくなるまで」という約束をし、その石を印として海に投げ入れ、証文とまじないの品(薬)を受けとった。その証文がずうっと某家に伝えられた。約束の印の大石は、河内小学校の後の海で、今も波に洗われている。

きてまじないの品は実は骨つきによく利いた。村の人達だけでなく、伝え聞いて遠方の人たちも直してもらっていた。ところが取扱者がその不思議なまじないの品を供え物の上へ置くだけでよいものを、その都度少しづつけずって飲ませていたので、品物が追々小さくなり、最後はなくなってしまうと同時に、この骨つきのまじないは、さっぱりきかなくなってしまう、かつはの証文は、さびびってしまった。ただ道壽が投げこんだ大石だけは残っていて、少々垢がらさく着けたまま、磯波に洗われている。(上図)

また一つの言い伝えは、住居を建てるにおたり、兄弟二人が山から大木をかっぎ出すこととなった。後をかっいだ兄の道壽が声きかけた。六道因「重くはないか」と弟は「重くはないが、足がぬかる」と答えた。見れば堅い地面に道因の足はめりこんでいた。それほど力が強かったという。今どきの者には想像できぬ話である。

いざれにしても兄弟とも無双の豪傑で、今尚残る道壽が投げ込んだという大石を見てわかる。

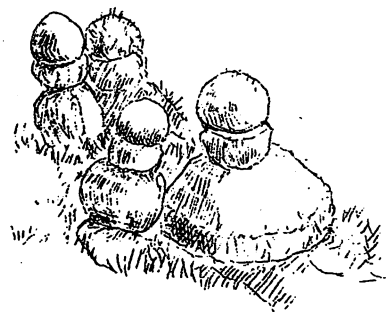
清藤の家は大きな邸宅で、ただ今の宮地谷にあって、三十人おまりの百姓をかかえた大家族で、一回お家大事に奉公し、四百年ほどにおたつて大名主の形で續いていたという。しかし、一度大火にかかり家を焼いたので、大切な品物をほとんどなくしたそうぞ、それらの中には加久屋新左衛門が、源義経から貰った手紙もはいっていたであらう。

さて、当時の人々の住居の場所や通路はどこであったらうか。恐らく今の村の住宅地は昔はほとんど海であったことが考えられる。昔からの言い伝えによると、庚申

塚の大松の舟をつないでいたそうだが、東の住宅地の上に  
残る海に出る道、三嶋谷などから海に出る道は今尚残つ  
ている。また宮路宅と三嶋谷の通行路も立派である。

いずれにしてもこの地には、戦争の目的でやって来た  
加久屋、清藤の一族がゆって来たが、はじめの目的を果  
たすことができず、しずかにこの地に住みつき、かつて  
の軍用金も殆んどこの地で生活に使われたものと思う。  
しかし、これといつて大きな遺跡のないのは、世を忍ぶ  
人となり、ひそやかに生活していたからではあるまいか。  
昔はかなりあちこちに五輪塔などがあったようだが、藪  
の中埋もれたたり、畑の開墾整理などで、今は殆んど失  
つてしまつたようである。

以上で伝説は終るわけであるが、加久屋新左工門の墓  
は内浦谷に、娘の墓は姫古谷に残り、道耆、道田の遺跡  
は宮路谷に残っている。尚内浦寺跡には、何かがあると  
の言い伝えもある。



この話日明治三十八年頃、当時八十才を越した老人が  
私の祖父に話してくれたもの、その老人も子供の時その  
祖父が、子供の時祖父から聞  
いた話の受けついで、正確な  
村の歴史というわけにもい  
まいが、ともかくも今からさ  
つと七、八百年前にさかのぼる  
昔物語である。(おあり)

三嶋谷の五輪塔群  
草臥うぼうと荒れた畑のほし、石垣  
に片よせて無難作に積み重ねられ、それ  
苔がつき、つる草がからんで、この伝承  
物語りに連なる人の墓ではあるまいか。

感想

河内の伝承を支持する

羽柴 弘

私は近ごろ五回目竹野浦河内歩きをして、前掲の吉  
田老の物語に關連する古跡探訪を重ねた。そのポイント  
を、簡単に並べて見よう。

① 三嶋谷の五輪塔群 附近は古く時代の集落のあったところと思  
われる。谷あいの土地が広く、谷水が豊富である。

② 道耆が海に投げ入れた岩 小舟の裏の磯にある。初めは道  
の門の近く、波うち際に、直立の形であったのを移したとい  
う。

③ 宮路谷の石の祠 吉田老は、これが道耆道田兄弟をまつるもので  
あるという。祠の安はさほど古くなく、文字も何一つ書かれてな  
い。しかし、いれおくりけが祠である。

④ 内浦谷の印塔 笠だけではあるが、道のまがり角、畑の隅にある。  
様式は古く、室新時代の宝篋印塔である。庶民の供養塔とい  
考えられない。

⑤ すぐ近くの二つの五輪塔 蜜柑畑の石垣の中に二基、はれこまれたよ  
うな格好で並んでいる。一つはメートル一つは九センチほど、夫婦が  
兄弟の墓とも思われる五輪をまつた塔。これと一般百姓の漁師  
の墓とは思えない。

⑥ 灘の長瀬家裏の五輪塔群 木立の中に地輪五、水輪四、火輪五  
ほどが、古くはかたはかた、長瀬家が、いれにまつている。  
この墓についての伝承は、全くない由であるが、水輪が最大なのは、  
直径が六〇センチほどある。これで五輪するならば、高さ一メートル六〇  
ほどのすばらしいものにかなる。室新時代初期あるいはもっとさ  
かりの頃かではないか。これも渡氏の墓とは思えない。

⑦ 地名について 桃が谷、娘たが念など、何かによるものと考え  
られる。(また外にもあるだろう。)

以上が、河内伝承の裏付けになるもので、はあるまいか。

(以上)